

学 会 報 告

日本リスク研究学会研究発表会

吉井 邦恒

2003 年度日本リスク研究学会第 16 回研究発表会は、「科学技術社会に生きる：個人，組織そして社会としてのリスク対応」を基調テーマとして，2003 年 11 月 20 日～22 日の 3 日間にわたり，茨城県東海村において開催された。

報告は，村上陽一郎氏（国際基督教大学）の特別講演「安全で安心できる社会を目指して」を間にはさみ，企画セッションと一般セッションに分けて行われた。そのうち企画セッションでは，「保険とリスクマネジメント」，「リスク規制と法制度」及び「組織リスク管理と組織風土」の 3 つのテーマごとに報告が行われた。

筆者は，「保険とリスクマネジメント」のセッションで，「収量変動と収入変動——農業者のリスク意識と保険——」というタイトルで，農業政策において価格安定制度が縮小・廃止され農業収入の変動リスクが高まっている中で，農業者は営農に関するリスクをどのように認識しているか，農業収入の変動に対応するための保険として，現行の収量保険（農業共済）と今後の実施が検討されている収入保険をとりあげ，米を事例とした予備的なシミュレーション結果を紹介し，収入保険の機能・意義等を整理した上で農業保険の政策的含意について報告を行った。

また，一般セッションには，「リスク認知とリスクコミュニケーション（1）～（4）」，「リスク意思決定と経済分析」，「リスク情報とデータベース」，「リスク問題の社会的ガバナンスと市民参加」，「自然災害リスクアセスメントと管理」，「環境・生態系リスクアセスメン

トと管理」および「社会技術システムのリスクアセスメントと管理」の 7 つのセッションが設置された。各セッションとも報告は 4～6 本程度行われたが，「リスク認知とリスクコミュニケーション」に属するものとして 22 本もの報告があった。

特に，研究発表会冒頭の「リスク認知とリスクコミュニケーション（1）」のセッションでは，農林水産省を例としたリスクコミュニケーション・養成プログラムの設計に関して，プログラムの設計思想とその内容や研修の効果について，木下富雄氏（甲子園大学）から報告があり，会場の大きな関心を集めていた。そのほか，東海村という場所柄から，原子力に関するリスクコミュニケーションについての報告が 4 本あった。中でも，東海村と周辺市町の住民のリスク認知の差や住民と行政・原子力事業者側とのコミュニケーションの機会の実態に関する住民意識調査を基に，リスクコミュニケーション活動の設計について分析を行った土屋智子氏（電力中央研究所）の報告が興味深かった。

現在，筆者らは「食料・農業の危機管理システムの構築に関する研究」（危機管理プロ）というプロジェクト研究の中で「食品・農産物の安全性に関するリスクの経済分析」という課題を担当している。本研究報告会でも，化学物質の暴露に関するリスク評価方法がいくつか報告され，自然科学系を中心としたこれらのリスク評価の分野では一定の方法論に基づいた詳細な研究が進んでいることに大きな刺激を受けるとともに，それらの方法をいかにして生かしつつ，食品・農産物に応用し経済分析に結びつけていくのが非常に難しい問題であることを痛感した。

なお，最終日には，特別企画として，公開ワークショップ「身近なリスクについて住民と語ろう」が実施され，食品，自然災害，廃棄物，化学物質，原子力等に関するリスクを取り上げ，リスクごとに住民との対話のテーブルがもうけられ，当該リスク研究の専門家が住民と意見交換を行う，文字通りのリスクコミュニケーション実践の場となった。